

もっと知りたい ふるさと

66

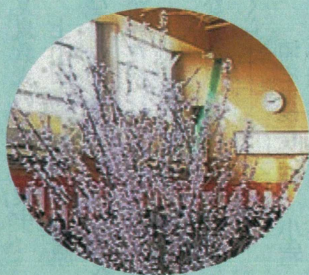
早咲きの「魯桃桜」

寒い寒い時期を過ぎ、待ち

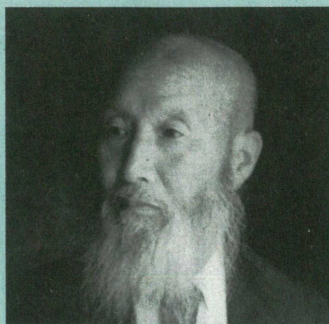
遠しい桜の季節がやってきます。たくさん桜の中で「魯

(露)桃桜」という名をご存知でしょうか。3月初め屋代の国道傍にあるレストラン庭に咲く桜。この花に会うと春を実感します。これが魯桃桜です。

ところがいつの間にかこの桜を見なくなりました。不審に思い確認すると、枝が折れ遂には樹を切り倒してしまっ



魯桃桜
(平成29年屋代中学校卒業式)

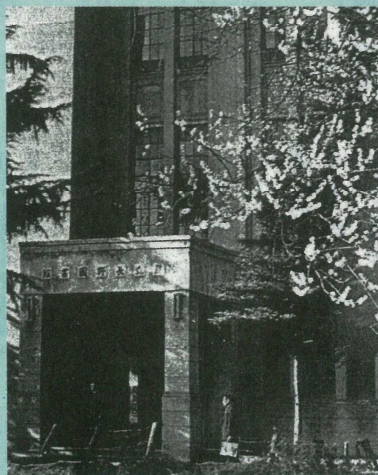


小山海太郎氏

たこのこと。何とも寂しい限りです。

次にこの花にまつわる話を書きます。

原産地は、中国(旧満州)の熱河からモンゴル陰山山脈地方で、山桃の種類であるといわれています。そういえば種は、桃の種を小振りにした形。長野県にもたらされたのは、日露戦争から帰った軍人が凱戦記念に持ち帰ったものらしいと伝えられています。



魯桃桜が咲く旧県立長野図書館前景

ところで、旧県立長野図書館が昭和4年に竣工しました。当時の館長乙部氏が、庭に珍しい花木を植えたものだと考え、友人の小山海太郎氏(東御市出身の博物学の先生)に相談します。海太郎氏はあれこれ思案した結果、昔見て印象的だった桜井村桜井尋常小学校(現佐久市)の中庭にあった桜のことが頭に浮かび、これだと決めて早速小学校から接穂を取り寄せました。植木専門業者に接木を依頼し、7本を旧県立長野図書館へ贈りました。「魯桃桜」という名前

は、海太郎氏の命名によるのですが、大変成長が早く、たちまち長野市の春を告げる花として有名になったのです。

ところで我が千曲市との関係ですが、屋代で花木を扱う西村さんから伺った話です。昭和28年頃、長野市の花専門業者から魯桃桜を花木として扱ってみることを勧められました。そこで図書館にお願いをして接穂から接木し、どんどん殖やしました。更埴地区では、一時西村さんを含め20軒もの方々が栽培に関わるほど盛んでした。昭和30年前後といえ、戦後10年以上が経過し、生活も安定して来た時期です。生花として、しかも早咲きの桜です。すから需要が多く、長野県は

かりでなく、関東・関西・北陸地方からも注文があり、活況を呈しました。

人気が出るに従い、埼玉県専門業者がカタログで取り上げるまでになり、一層全国に拡がりました。例えば、四国の花の業者まで取り扱うようになつたということです。

この花の売りは、やはり「早咲き桜」ということです。

桜の花は、「春化」といって低温刺激による休眠解除(桜の開花のためには、寒い期間が大切になる)の働きを応用し、一定期間魯桃桜の花木を寒さに晒し、1月から2月にかけてビニールハウス内に入れ、しばらく暖房をかけて花を咲かせます。つまり、早咲きの早咲きということ、人々か

ら珍重されるわけです。しかし、この桜の将来は、栽培者が減少しているため必ずしも明るくはないようです。それが気がかりです。

桜の名称には、人の関わりや歴史の重なりがあり、先人の努力や継続による文化遺産ともいわれます。花の美しさだけでなく、人との関係も価値があります。それらを知ること、さらに、この桜の良さを楽しむことが出来るのではないのでしょうか。

参考『魯桃桜と図書館』

小山日出夫著

『県立長野図書館30年史』

杭瀬下 青木 聡